

モンゴルの大学生の自由時間の過ごし方と主観的幸福感に関する研究

SHIRENDEV OYUN-ERDENE¹・大森 宣暁²・長田 哲平³

¹学生会員 宇都宮大学 工学部 (〒321-8585 栃木県宇都宮市陽東7-1-2)

E-mail: t152822@cc.utsunomiya-u.ac.jp

²正会員 宇都宮大学教授 地域デザイン科学部 (〒321-8585 栃木県宇都宮市陽東7-1-2)

E-mail: nobuaki@cc.utsunomiya-u.ac.jp

³正会員 宇都宮大学助教 地域デザイン科学部 (〒321-8585 栃木県宇都宮市陽東7-1-2)

E-mail: osada-teppej @cc.utsunomiya-u.ac.jp.

モンゴル国の首都ウランバートル市は若者が多く、人口の集中化により大学生の93%がウランバートル市に住んでいる状況である。若者が多いものの、自由時間を過ごす施設や機会が少ないことが問題となっている。本研究では、ウランバートル市の中心部と郊外部にある文系と理系の6大学の学生を対象に、学生生活の実態、特に、自由時間の過ごし方とその満足度と主観的幸福感との関係を明らかにすることを目的とする。分析の結果、性別、学年、大学、出身地、世帯構成、アルバイト状況、交通手段、お金、携帯・PC・TVに関する活動、家族や子供と過ごすことが満足度と主観的幸福感に影響を与えることと、中心部にある大学の学生ほど主観的幸福感が高く、郊外部にある大学の学生ほど自由時間の満足度と主観的幸福感が低いことが明らかとなった。

Key Words : *Leisure activity, subjective well-being, university students, Mongolia*

1. はじめに

(1) 研究の背景と目的

モンゴル国は、1989年に始まった民主化運動をきっかけに社会が大きく変わった。民主主義社会になると同時にウランバートル市は急速に都市化が進み、都市へ移住する人々が急激に増加した。現在、ウランバートル市の人口は146万人、モンゴルの人口全体の46%を占める。さらに、ウランバートル市の人口の64.3%は35歳以下の人であり、モンゴルの大学生全体の93%がウランバートル市に住んでいるという状況である(2017年)¹⁾。

モンゴルでは、若者にとって「教育環境の不備」「労働・社会福祉」「社会参加・義務」「健康・自由時間の過ごし方」の4つが課題として挙げられている²⁾。この4つの課題の中の「自由時間の過ごし方」に着目して研究を展開している。近年、公園や遊園地、カフェやレストラン、映画館、コワーキングスペース、ジム等の施設は増えつつあるが、まだまだ若者の需要に答えきれていないことが問題となっている。10代からデジタル環境に慣れ親しんだ初の世代と呼ばれる「ミレニアル世代」は、コミュニティや人間関係を重視し、物の所有に重きを置かない傾向にあるなど、基本的な価値観がそれまで

の世代とは異なり、自由時間の過ごし方も変化してきている³⁾。

次に、近年、国や自治体の政策が市民生活に与える影響を評価する指標として、生活の質(QOL)や幸福度が注目されている⁴⁾。真のQOLを測るために、主観的な側面をより重要視するようになり、その代表的な概念として、行動経済学の分野で提唱されている主観的幸福度(Subjective Well-Being)がある。主観的幸福度は、健康、仕事、教育学習、余暇娯楽など多様な生活行動に影響を受け、人々の生活の質や幸福度から構成されている⁵⁾。

以上の背景から、本研究は、自由時間における活動といった生活行動を中心に、ウランバートル市の学生生活の実態と、自由時間に対する満足度や主観的幸福感に影響を与える要因を明らかにすることを目的とする。

(2) 既存研究の整理と本研究の位置付け

モンゴルの若者の自由時間における活動に関する研究として、P.Tserenbazar⁶⁾は、23~33歳のウランバートル市に居住している若者の自由時間の状況を明らかにした。齋藤⁷⁾はモンゴルの大学生の学生結婚と出産についての意識を明らかにし、子育てをしている大学生の生活の現状を把握した。日本での若者と余暇活動に関する研究として、菅野⁸⁾は、首都圏および地方都市の大学生を対

象に飲酒活動、趣味・娯楽活動の2種類の余暇活動の実態を把握し、余暇活動と生活の質の一指標として主観的幸福感との関係を明らかにした。そして、森本ら⁹⁾は都市圏全域を対象に余暇活動を、仕事飲酒、私的飲酒、娯楽活動、文化活動の4つに分類して実態を把握し、若者の地域定着や移住に余暇活動の満足度は少なからず影響を与えていること、個人属性の違いによる余暇活動の頻度、消費金額、活動場所の違いを検討した。

一方、若松ら¹⁰⁾は、大学生を対象に人生全体を通してのQOLを構成する要素を把握した。大学生のQOLに関連する要因としては、親密な対人関係や、仲間、外集団との関わりに関する領域を挙げた。また、吉中ら¹¹⁾は、日本の地方大学の学生にとっての幸福度と幸福度に影響を与える要因を検討し、幸福度を判断する場合に「自由な時間」「充実した余暇」「趣味などの生きがい」「友人関係」「職場・学校等の人間関係」等を重要視していることを述べている。

既存研究においては、若者の自由時間における活動に関するものはあるが、ウランバートル市の大学生の昼と夜の自由時間における活動に対する実態を明らかにしたものはない。そこで、本研究では、ウランバートル市の大学生の実態を明らかにするために、6大学の学生にアンケート調査を実施し、自由時間における活動に対する満足度と生活の質の一指標として幸福感に影響を与える要因を明らかにすることを目的とする。これは、ウランバートル市の大学生の生活の質を上げるための改善策を考える上で重要な意味を持っていると考えられる。

2. アンケート調査概要

ウランバートル市の中心部にある4大学と郊外部にある2大学に通学する大学生に対して、2018年10月にアンケート調査を実施した。表-1に調査概要を示す。モンゴル科学技術大学の工学部の1～5年生（近年より5年制度に変更）、モンゴル国立農業大学の農学部1～4年生、モンゴル国立大学の文系の1～4年生、新モンゴル工科大学の工学部の1、2年生、アチ医科大学の医学部の1～4年生、エイトゲン大学の医学部の5年生を中心にそれぞれアンケート調査を実施した。

調査では、自由時間における活動を、予め用意した活動内容リストから3つまで、昼と夜に分けて選択してもらった。また、自由時間の実態には、9月～10月の一か月の内容を回答してもらった。生活の質を求めるものとして、内閣府⁴⁾の調査に準拠し、主観的幸福感尺度を用いた。これは、「現在、あなた自身はどの程度幸せですか。」という設問を用い、「非常に幸せ」を10点、「非常に不幸せ」を0点として、主観的幸福感を聞いた。

表-1 調査概要

調査期間	平成30年10月22日～26日
調査対象者	国立3つ、私立3つの大学の1～5年生 国立： 大学1) モンゴル科学技術大学/ШУТИС(n=132) 大学2) モンゴル国立農業大学/ХААИЦ(n=143) 大学3) モンゴル国立大学/МУИС(n=99) 私立： 大学4) 新モンゴル工科大学/ИИМ(n=80) 大学5) アチ医科大学/АЧ(n=145) 大学6) エイトゲン大学/ӨГҮ гэн(n=141) 計6大学の740人
調査方法	授業中に用紙を配布&回収
調査項目	性別、年齢、学年、出身地、現在の住居、世帯構成、子供の数、アルバイトの有無、アルバイトの頻度と1日あたりの時間、携帯電話/スマホ/PC/タブレットの勉強や研究以外の使用時間、通学/帰宅の主な交通手段・所要時間・渋滞状況、生活費以外に自由に使えるお金・その源、宅内外志向、一日の自由時間（平日/休日）、自由時間に誰とどこで何をしているか（昼/夜）、活動に対する満足度、満足でない理由、今はできていないが行いたい活動、できない理由、主観的幸福感（10点満点）

3. 大学生の自由時間の過ごし方の実態に関する分析

(1) 個人属性

6大学で得られた740人のサンプルのうち64%が女性、36%が男性であり、17～22歳が93%であった。64%が市外出身で、地方からウランバートル市に転居し、親や兄弟姉妹と一緒に住んでいる学生がほとんどである。子供がいる学生は8%で、子供の面倒を主にしている人は学生の親であると考えられる。通学時の主な交通手段としてバスを利用する学生は70%であることは特徴的である。アルバイトに関しては、日本と違って（日本の場合63%）⁸⁾、26%がしていると回答した。アルバイトをしている学生の中、一日当たり8時間以上働く学生は多かった。理由として、時給が低いことからお金を稼ぐために長時間にわたって働く学生がいるということが考えられる。

(2) 自由時間における活動の実態

生活費以外に自由に使えるお金に対して、0円¹²⁾より多く、50,000円以下（日本で約1.7万円）を使っている学生が半分であり、自由に使えるお金が全体的に少ないということが分かる。男女別で大きい違いは見られなかったが、年齢で見たところ、20～24歳の学生は他の学生よりお金を多く使っていることが分かった。アルバイトをしている学生は少ないため、生活費以外に使うお金を親、親戚、夫、妻からもらう学生が多い。自由時間を家の中と外どちらで過ごすのが好きかという質問に対して、ウランバートル市出身より市外出身の方が家の中で過ごす

のが好きと回答していることから、外で活動をする機会が少ないということが考えられる。そして、一日の自由時間の平均は、平日では3.7時間、休日では7.5時間であることが分かった。

男女別の昼と夜の自由時間における活動に対して、上位10項目まで挙げたものを図-1と図-2に示す。昼は全体的に、読書・勉強と家族、子供、友達や恋人と過ごす活動が多かった。男性は、身体を動かす活動とゲームセンターで遊ぶことが多く、女性は、読書・勉強、家族や子供と過ごすこと、携帯やテレビ等に関する活動、喫茶店、飲食店、映画館や図書館等に行くことが多い。一方、夜は全体的に、家族や子供と過ごすこと、家でテレビを見ること、そして、携帯を使うことが多かった。男性は、パソコンに対する活動と特に何もしていないが多く、女性は、家族や子供と過ごす、テレビや携帯等に関する活動、読書・勉強、そして、喫茶店、飲食店、映画館や公園等に行くことが多い。ウランバートル市の大学生の一番多い活動として、「昼に大学で勉強、夜に家で過ごす」という活動であることが分かった。家の中と外どちらで過ごすのが好きかという質問に対して中と答えた学生が多く、実際、昼と夜は自宅で過ごしている学生が多いことから、自宅外で過ごすことに対する魅力が低いことが分かる。喫茶店、飲食店、映画館や公園等は女性にとっては魅力があり、スポーツセンターやゲームセンターは男性にとって魅力があると考えられる。また、自由時間の活動に対する不満としては、昼は「施設が少ない」「交通の問題がある」、夜は「施設が少ない」「経済的に余裕がない」という回答が多い傾向が見られた。

また、大学別の昼と夜の自由時間における活動に対して、上位10項目まで挙げたものを図-3と図-4に示す。新モンゴル工科大学（大学4）のサンプル数に新モンゴル高専の学生も含まれていること、大学生と高専の学生の自由時間における活動が異なるということから、大学4だけ差が大きい結果になったと考えられる。昼の場合、傾向が見られたのは、ウランバートル市の中心部にあるモンゴル国立大学（大学3）の学生は喫茶店や飲食店等に行くことが多いことから、大学3の学生が喫茶店や飲食店にすぐ行ける環境にあることが分かる。一方、夜の場合、モンゴル国立農業大学（大学2）の学生は、喫茶店、飲食店、映画館等に行くことが少ないことから、当大学は元々お金持ちが住んでいる地域にあるため大学周辺の飲食店が高く、ある場所によって差別があり、学生の行く場所が限られていると考えられる。

(3) 現在できていないが行いたい活動とその理由

男女別の現在できていないが行いたい活動に対して、上位10項目まで挙げたものを図-5に示す。全体的に、外国語能力を上げるための活動が一番行いたい活動として

挙げられ、その中、女性の占める割合が多かった。また、ジム・フィットネスに行くことやスポーツに関する活動をしたという学生の中、男性が多いことが分かった。これに対して、できない理由も聞いたところ、時間的にも経済的にも余裕がないということ、快適な施設が少ないということや、そもそも施設が少ない等という施設に関する問題が一番多かったことから、経済的に管理できる、外国語能力を上げるための塾や、ジム・フィットネスを増やすことが必要である。また、時間的に余裕がないということに関しては、勉強時間と通学時間が長いという2つの理由が考えられる。都市計画的に改善できるのは、通学時間を短くすることと交通渋滞を減らすことが必要である。

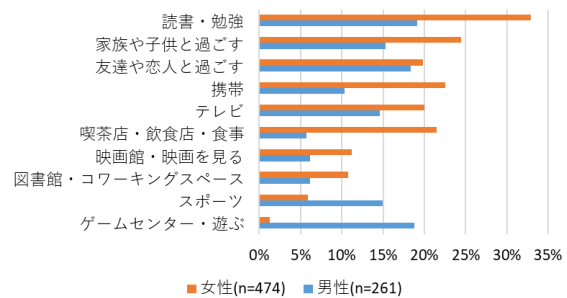


図-1 昼の自由時間における活動（上位10項目，複数可）

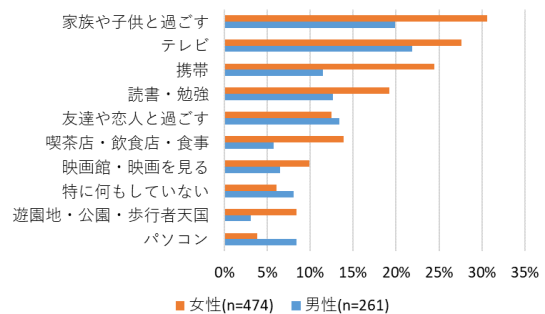


図-2 夜の自由時間における活動（上位10項目，複数可）

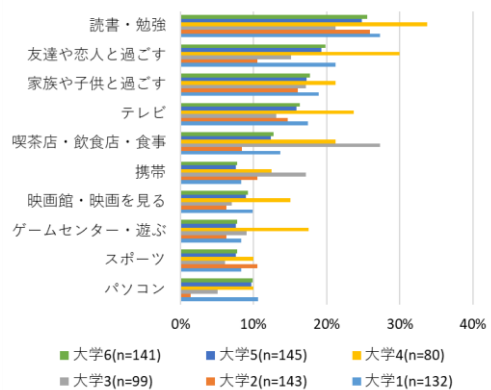


図-3 昼の自由時間における活動（上位10項目，複数可）

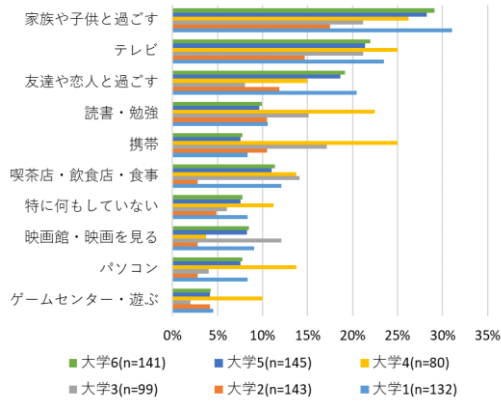


図-4 夜の自由時間における活動（上位10項目，複数可）

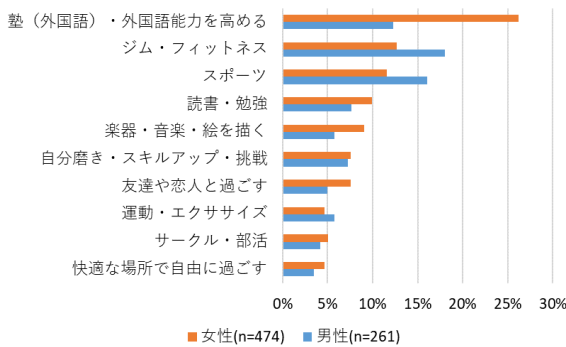


図-5 男女別の行いたい活動（上位10項目，複数可）

4. 自由時間に対する満足度と主観的幸福感に影響を与える要因に関する分析

(1) 昼の自由時間における活動に対する満足度

ここでは、昼の自由時間における活動に対する満足度（0～4）を被説明変数，個人属性と自由時間における生活行動の実態を説明変数として，分析ソフト NLOGIT5 を用いて分析した。被説明変数が 5 段階の正規分布であるため，Ordered Probit Model を採用した。満足度が k である確率 $P(k)$ を， Φ を標準正規分布の累積関数として，効用関数 V と閾値パラメータ θ を用いて，式(1)で表す。

$$P(k) = \Phi(\theta_k V) - \Phi(\theta_{k-1} V) \quad (1)$$

$$V = \sum \beta_i X_i \quad \beta_i : \text{パラメータ} \quad X_i : \text{説明変数}$$

昼と夜の自由時間における活動に対する満足度のモデルとなるモデル 1 と 2 の説明変数の詳細を表-2 に，有意な変数のパラメータ推定結果を表-3 に示す。

分析結果として，男性，彼氏/彼女か夫婦か子供と住んでいる学生ほど昼の活動に対して満足していることが分かった。一方，ウランバートル市出身，昼の自由時間に携帯・パソコン・テレビ等に関する活動をしている，特に何もしていない学生，または，時間的にも経済的にも余裕がない，快適な施設が少ない，そもそも施設が少

ない，一緒に活動する仲間が少ないと感じる学生ほど昼の活動に対して満足していないことが確認された。携帯・パソコン・テレビ等といったテクノロジーに対する活動は私たちの日常生活やコミュニケーション等に影響を与え，私たちの生活の中で中心的な役割を果たしているが，これには悪い影響もあることがこの結果から分かる。そのため，携帯・パソコン・テレビ以外の何かの活動ができる機会を増やすことが重要な課題である。

表-2 モデル1と2の説明変数の詳細

説明変数	ダミー変数で1としたもの	
大学5	大学5に通学する学生	
性別	男性	
出身地	ウランバートル市内	
世帯構成1	子供と住んでいる	
世帯構成2	彼氏/彼女と住んでいる	
世帯構成3	子供か彼氏/彼女か夫婦と住んでいる	
アルバイト状況	アルバイトをしている	
活動内容	携帯	携帯を使っている
	携帯・PC・TV	携帯・PC・TV等に関する活動をしている
	家族・子供	家族や子供と過ごしている
	買物	ショッピング・買物をしている
	何もしない	特に何もしていない
不満の理由	経済的余裕	経済的に余裕がないと感じる
	快適な施設	快適な施設が少ないと感じる
	施設の数	そもそも施設が少ないと感じる
	施設の営業時間	施設の営業時間が適切ではないと感じる
	時間的余裕	自由時間がないと感じる
	一緒に活動を行う人	一緒にその活動を行う人が少ないと感じる
	他人の不満	家族や彼氏/彼女が不満を持つと感じる

表-3 モデル1のパラメータ推定結果

説明変数	係数	t値
性別	0.223	2.26 **
出身地	-0.170	-1.77 *
世帯構成3	0.467	3.09 ***
携帯・PC・TV	-0.191	-1.97 **
何もしない	-0.355	-2.06 **
経済的余裕	-0.571	-4.84 ***
快適な施設	-0.516	-4.33 ***
施設の数	-0.357	-3.05 ***
時間的余裕	-0.260	-2.2 **
一緒に活動を行う人	-0.672	-4.51 ***
定数項	2.764	27.38 ***
Mu(01)	0.195	3.27 ***
Mu(02)	1.806	30.62 ***
Mu(03)	2.702	42.16 ***
L(C)		-733.26
L(B)		-647.10
-2(L(C)-L(B))		172.3
観測数		586

※*** : $p < 0.01$, ** : $p < 0.05$, * : $p < 0.1$

(2) 夜の自由時間における活動に対する満足度

一方、夜の自由時間における活動に対する満足度に関して、上記と同じ分析を行った。有意な変数のパラメータ推定結果を表-4に示す。

分析結果として、彼氏/彼女か子供と住んでいる、アルバイトをしている、夜の自由時間に家族や子供と過ごしている学生ほど夜の活動に対して満足していることが分かった。一方、郊外部にあるアチ医科大学（大学 5）に通学する、夜の自由時間に携帯を使う、ショッピングや買物する学生、または、時間的にも経済的にも余裕がない、快適な施設が少ない、そもそも施設が少ない、施設の営業時間が快適ではない、一緒に活動する仲間が少ない、家族や彼氏/彼女が本人に対して不満を持っていると感じる学生ほど夜の活動に対して満足していないことが確認された。

(3) 主観的幸福感

ここでは、主観的幸福感（0～10 点）を被説明変数、個人属性と自由時間における生活行動の実態とその満足度（0～4）を説明変数として、分析ソフト NLOGIT5 を用いて分析した。被説明変数が 0～10 と限定された範囲の値であるため、上限と下限を持つ Tobit Model を採用した。主観的幸福感 y 、潜在変数 y^* 、説明変数ベクトル x 、パラメータベクトル β 、誤差項 ε 、（平均 0、分散 σ^2 の標準正規分布に従う）とすると、式(2)が成り立つ。

$$y^* = \beta x + \varepsilon (\varepsilon \sim N(0, \sigma^2)) \quad (2)$$

$$y = 0 \quad (y^* \leq 0 \text{ のとき})$$

$$y = y^* \quad (0 < y^* < 10 \text{ のとき})$$

$$y = 10 \quad (10 \leq y^* \text{ のとき})$$

モデルの説明変数の詳細を表-5 に、パラメータ推定結果を表-6に示す。

モデル全体の説明力は低い結果となったが、これは主観的幸福感が、今回の調査で得られた項目以外に多様な要因が関係していることを示唆するものと考えられる。

ここで、有意となった説明変数に着目すると、以下が読み取れる。中心部にあるモンゴル国立大学（大学 3）に通学する、4～5 年生、彼氏や彼女と住んでいる、生活費以外に自由に使えるお金が多い、昼と夜の自由時間における活動の満足度が高い学生ほど主観的幸福度が高いことが分かった。一方、郊外部にあるモンゴル国立農業大学（大学 2）に通学する、ウランバートル市出身、徒歩で通学している、自由時間における活動に対して交通が問題であると感じる学生ほど主観的幸福度が低いことが分かった。また、昼の満足度の係数が高いことから、夜より昼の活動の方が重要であることが確認された。

徒歩に関しては、学生は年間料金を払って一年間バスを無料で使用できるようになっているものの、バスを利用しないで歩くことが多い。その理由として、バスの数

表-4 モデル2のパラメータ推定結果

説明変数	係数	t値
大学5	-0.045	-1.94 *
同居状況1	0.464	1.73 *
同居状況2	0.992	3.69 ***
アルバイト状況	0.217	1.97 **
携帯	-0.289	-2.54 **
家族・子供	0.187	1.71 *
買物	-0.491	-2.12 **
経済的余裕	-0.293	-2.28 **
快適な施設	-0.384	-2.97 ***
施設の営業時間	-0.339	-2.19 **
施設の数	-0.232	-1.69 *
時間的余裕	-0.562	-4.32 ***
一緒に活動を行う人	-0.488	-2.77 ***
他人の不満	-0.328	-1.83 *
定数項	2.501	29.09 ***
Mu(01)	0.349	5.27 ***
Mu(02)	1.772	31.09 ***
Mu(03)	2.532	40.74 ***
L(C)		-753.15
L(β)		-674.62
-2(L(C)-L(β))		157.0
観測数		586

※ *** : p<0.01, ** : p<0.05, * : p<0.1

表-5 モデル3の説明変数の詳細

説明変数	説明変数の詳細
大学2	1 : 大学2に通学する学生, 0 : それ以外
大学3	1 : 大学3に通学する学生, 0 : それ以外
学年	1 : 4～5年生, 0 : 1～3年生
出身地	1 : ウランバートル市内, 0 : 市外
世帯構成	1 : 彼氏/彼女と住んでいる, 0 : それ以外
交通手段	1 : 徒歩で通学している, 0 : それ以外
お金	一か月の生活費以外に自由に使えるお金 (連続変数)
昼の満足度	4 : 満足 ~ 0 : 不満
夜の満足度	4 : 満足 ~ 0 : 不満
交通問題	1 : 交通問題があると感じる, 0 : それ以外

表-6 モデル3のパラメータ推定結果

説明変数	係数	t値	L(C)
大学2	-0.319	-2.24 **	-1230.40
大学3	0.360	3.54 ***	L(β)
学年	0.699	3.26 ***	-1132.67
出身地	-0.363	-1.76 *	-2(L(C)-L(β))
世帯構成	0.834	1.67 *	195.5
交通手段	-0.562	-2.45 **	観測数
お金	0.002	1.96 **	553
昼の満足度	0.797	5.12 ***	/
夜の満足度	0.254	1.74 *	
交通問題	-0.469	-2.02 **	
定数項	3.709	9.97 ***	
σ	2.227	29.58 ***	

※ *** : p<0.01, ** : p<0.05, * : p<0.1

が少ないため混雑が発生すること、交通渋滞に合うこと、強盗等という治安の問題があるため徒歩で通学している学生が多いことが考えられる。そのため、自家用自動車の通行を制限し、バスや路面電車やLRT (LightRail Transit) やタクシー等の公共交通機関だけが優先的に通行できる形態の歩車共存道路となるトランジットモールを導入することや、現在のウランバートル市では実現可能なカープール等の相乗りや、最も根本的なのはバス車内を清潔な環境にし、人々の態度を変えるとといったMM (Mobility Management) 等が必要である。

5. 結論

本研究では、貴重なデータが得られ、ウランバートル市の大学生の自由時間に着目し、性別、出身地、同居状況、大学所在地、学年等の個人属性と、アルバイト、通学時の交通手段、自由時間に使うお金、自由時間における活動といった生活行動の実態とそれに対する不満が、満足度と主観的幸福感に与える影響を分析した。具体的には、学生にとって同居状況は重要な要因で、彼氏/彼女、夫婦や子供と同居している学生は昼と夜の自由時間に対して満足しており、主観的幸福感も高いことが分かった。昼と夜の満足度に影響を与える要因を比較すると、昼は性別と出身地が有意で、夜は大学とアルバイト状況が有意となり、自由時間における活動として携帯を使うことの影響は昼と夜の満足度のどちらにもマイナスの影響が出ていることが分かる。また、中心部にある大学の学生は幸福感が高いものの、郊外部にある大学の学生は満足度と幸福感が低いことが明らかとなった。以上の結果から、モンゴルの学生の個人属性と自由時間の活動とその満足度が生活の質の指標となる主観的幸福感に影響を与えることが分かった。

今後の研究課題として、SEM (構造方程式モデリング) 等の詳細な分析、日本⁹⁾とモンゴルの大学生の自由時間における活動との比較などが興味深いものと考えている。また、未回答や誤回答を防ぐためにWEBによるアンケート調査を行う必要がある。今回用いたNLOGIT5の分析では、観測数が586と553という少ないサンプル数になったが、これも未回答者が多いことが原因である。観測数を増やすことで、よりよいモデルを作成できると考えられる。

最後に、今回の調査では、渋滞に合う人の割合が多かったことと交通の問題が主観的幸福感に影響を与えることから、渋滞が多い場所を調べ、問題の解決方法を考えることが重要な課題である。

謝辞：本研究は、日本交通政策研究会(研究代表者：大森宣暁、課題名：夜の生活活動を支える都市と交通のあり方に関する研究)、および科学研究費補助金(基盤A)(研究代表者：張峻屹、課題名：地方都市への若者の移住・定住促進策に関する学融合研究、課題番号：15H02271)の助成を受けたものである。また、アンケート調査の実施にご協力頂いた、モンゴル科学技術大学のS.Amgalan先生、T.Bayasaa先生、Bayartsetseg先生、モンゴル国立農業大学のL.Bold先生、モンゴル国立大学のP.Tserenbazar先生、新モンゴル工科大学のP.Gunjee先生、アチ医科大学のB.Bulgantsetseg先生、エイトゲン大学のU.Tserendolgor先生に、ここに記して謝意を表す。

補注

- [1] 大学での授業時間とアルバイトの時間と睡眠時間を除いた時間を自由時間とする。
- [2] モンゴル国の通貨単位である。(₮：トゥグルグ)

参考文献

- 1) 文部科学省：2017-2018年の大学統計データ <https://mecss.gov.mn/>
- 2) Open Society Forum：「若者対策」<http://forum.mn/>
- 3) 特集：ミレニアルズと都市、都市計画、Vol.66, No.3, pp.8-72, 2017.
- 4) 内閣府 幸福度に関する研究会：幸福度に関する研究会報告—幸福度指標試案一, 2011, <http://www5.cao.go.jp/keizai2/koufukudo/koufukudo.html>
- 5) 市民生活行動研究小委員会：市民生活行動学, 土木学会, 2015.
- 6) P.Tserenbazar：「ウランバートル市の若者のライフスタイルに関する研究-1980~1990年生まれ、大学卒のウランバートル市に住んでいる若者を事例に」2013
- 7) 齋藤香里：「モンゴルの大学生の学生結婚と出産についての意識および子育てをしている大学生の生活実態」、『千葉商大紀要』第51巻第1号(通号172), pp73-90, 2013
- 8) 菅野健, 大森宣暁, 長田哲平：「大学生の余暇活動と主観的幸福感」, 土木学会論文集 D3 (土木計画学), Vol74, No.5, pp809-816, 2018
- 9) 森本瑛土, 大森宣暁, 菅野健, 長田哲平：「若者の余暇活動の実態と意識-地方都市への地域定着や移住に着目して」, 土木学会論文集 D3 (土木計画学), Vol.73, No.5, pp537-547, 2017
- 10) 若松拓也, 内山聡, 茂原直樹, 大木桃代：「大学生のQOLに関連する要因の検討」生活科学研究, 29巻, pp.189-202, 2007
- 11) 吉中李子, 清水池義治, 安藤清一：「大学生にとっての幸福度-名寄市立大学生を対象としたアンケート調査からの予備的考察」名寄市立大学道北地域研究所年報, 第33号, pp. 73-83, 2015

(2019.3.10 受付)